



サンプル版

— 成人向け —
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

クロの人生サンプル版

にのまえ

目次

【プロローグ】	3
【茜と目玉焼きの朝】	18
【宅配ボックスの荷物】	30
【最初のご主人さま、次に犬】	41
【クロの朝】	89

【プロローグ】

まったく信じられないことばかりだ。常識から外れた、不自然なことばかりだ。

けれどもそもそも、自分がこんな場所で寝起きしていることがおかしいのだ。変な場所に変な人間がいる。だから、変なことばかり起きるのは、ある意味当然なのかもしれない。

自分がここにいるのが悪い。

暮石茜は現実逃避にそんなことを考えていた。

「っふ、……ふ……っ」

頭は現実から目を背けようとしているのに、体だけは正直だ。

茜はダイニングテーブルの上に座っていた。上半身を少しだけ倒して、後ろに付いた手で体重を支えている格好だ。だから、目の前の

男には、その手が細かく震えていることには気づかれていないはずだ。バレてない。大丈夫だ。茜は自身にそう言い聞かせる。

どうして体だけ勝手に怖がるのだろうか。どうして頭で理解していないことを体が理解しているのだろうか。

そういう新しい現実逃避から呼び戻すように、目の前の男は柔らかく言う。

「……怖い？ 大丈夫だからね」

甘い声だ。

低いのではない。高校生の彼は背丈こそ十分伸びているけれど、体つきも声も、まだまだ成長の余地を残していた。筋肉より身長に栄養を使われた骨っぽい体つき。名前の通り涼しげな、年齢相応の中低音。

神成涼真。

清潔そうな顔立ち。柔和な表情。いつだって散髪帰りのようにすっきりした襟足に、一

時間ごとに着替えているかのようなシワのない服。今日だって学校帰りだろうに、ワイシャツにもグレースラックスにも、汚れや疲労、現実味が染み込んでいない。

清く育った金持ちの一人息子。まさしくそんな外見だ。

「これは痛くない。一ヶ月間ここにいて、茜さんはもうわかってるよね？」

「……馬鹿げた……いつまで、こんな……」

「いつまでなんて、そんな制限はないよ。大丈夫。全部大丈夫なんだって、きっと今にわかるから」

そう言って涼真は手を伸ばし、茜の頭を撫でようとした。

彼はダイニングテーブルについていて、茜は彼と向かい合う形でテーブル上に座っている。頭に触れるには若干距離がありすぎるのだ。

身を引けばその手を避けるのは簡単だった。嫌がった、と見てわかる逃げ方だったろうに、その男は怒らない。ただきょとんと瞬いている。

「……やめろ」

汚いだろう、とは言えなかった。

清潔な男。冗談みたいに広い部屋と、そこに揃った磨かれた家具。

その中で茜だけが小汚い。

うなじを隠すほど伸びたボサボサの髪が、今は汗で首筋に張り付いている。きっと見苦しいだろう。服だって同じだ。古びて伸びた長袖シャツの袖口は、モダンなダイニングテーブルを拭うどころか逆に汚している。

茜は彼が怖い。彼が言うこと、行うこと、思い浮かべることすら怖い。けれど今逃げたのは羞恥心だった。自分だけが汚くて、触れられるとそれに気付かれる、という不安感。

「……………」

「警戒心が強いのはいいことだ」

行き場のない手が降りたのは茜の腹だった。服の上から労るように腹をさすると、温かい手はごく自然に裾から入り込んでくる。

「……っ」

「……茜さんの体、緊張して固くなってる。筋肉があるからわかりやすいな。大丈夫だよ。痛くしないから。それに、茜さんはもう気持ちよくなれるだろう？」

「っ、なれる、わけ……っないだろ……っ、うッ」

反論を咎めるように乳首を弾いた指先は、自分の行いを忘れた素振りで胸をさすり、すぐに去る。

次に手に取ったそれが本番なのだ。

茜の横に置かれていた冷たい色の棒。ステンレスの、耳かきほど細いものだ。

涼真はゼリーのように硬いジェルを棒に塗りつけ、それから濡れた手を拭うように茜の股間に触れた。自分自身信じられないが、茜は下半身に何もまとわないうままテーブルに座っている。相手に強制されているとはいえ、十歳近く年下の涼真に局部を晒しているのだ。

「っ、ふ、……っ♡」

馴染んだ手付きとジェルの感触にほんの僅かに息が漏れるが、恐怖と抵抗感で力が入り切らない。

けれど萎えていたほうが都合がいいのだと茜は知ってしまった。

「ゆっくりね。大丈夫」

「っ、ぐっ、う、う、う……ッ！」

棒の先端は雫が溜まっているように丸く膨らんでいる。その丸みが尿道口を撫で回したと思うと、ゆっくり中に侵入してきた。

陰茎の内部など、せいぜい一生に一度、医師に触られるくらいだろう。けれど茜はもう何度もその感触を味わっている。痛みや違和感以外のものを感じてしまうほどに何度も。

ましてや侵入しているものを感じさせるように狭い指の輪で扱かれると、どんどん硬く張り詰めてしまう。

「っは、あ……っ、あ……っ♡」

「あんなに怖がってたのにいつもこうして気持ちよくなる。茜さんは怖いことが好きなんだね」

「そんな、っわけ、ッない、い……！」

「本当？ 俺は茜さんがマゾでも変に思ったりしない。本当のことを言ってくれていいんだよ。……こっちももう、開発進んできたよね？」

「ッ、お、おッ♡」

涼真は腹へ抱きつくようにして茜の腰を抱き寄せると、自然と晒すことになった奥へジェルまみれの指を押し込んだ。親指とはいえたった一本だ。それでも抵抗なく飲み込む己の穴に茜は泣きたくなくなってしまう。

けれどそんなの些細なことだ。そこで快感を覚えると教え込まれていることに比べたら、本当に小さな問題だ。

茜は口をつぐんで必死に声を飲み込んだ。

親指が熟知している前立腺を捏ね回し、同時に自由な四本指が陰茎の根本をくすぐる。むず痒さを解消してくれるのは尿道ブジーだ。くすぐられている根本を中からゆっくり搔かれると、内側を擦られる気持ちよさに、搔痒感を慰められる快感が上乘せされる。

普通の男は一生知らない感覚だ。茜だって知らずに死ぬつもりだった。直視できない屈

辱と感じたくない快感に、茜は知らぬ間に天井を見上げていた。

けれどそれは顔を隠したのと同じことだ。叱るように、後ろに入った指が前立腺を強く押し込む。茜の足がぎゅっと縮まった。

「っう、ううううっ♡♡」

「ちゃんと俺を見て」

「……っ、み、見る、見るから、やめろ…
…っお♡♡」

「そう。そのまま。……泣いてる？ ごめんね」

睨みつけたつもりだったがこんな状況では威圧感など出せない。涼真は謝罪しながらも悪びれた様子なく、茜の反応を見ながら中への刺激を変える。

親指だ。そう器用な動きは出来ない。けれどわざと前立腺を避けるくらいは簡単だ。

「っ、う、う……っ♡ おお、お……っん、ん♡」

物足りない。快感のポイントを指の先がかすめ、無意識に腰が指を追おうとしてしまう。

なんていう有様だ。こんな惨めな姿を、まさか、こんな子供に見せるなんて。こんな強姦魔に屈するなんて。屈辱感に涙をにじませると、涼真はうっとりとした息を吐いた。

やばい、と身構える前に、ブジーの角度が変わる。尿道奥の曲がり角をいとも簡単にくぐり抜けた先端が、薄い内壁越し、前立腺を押し込んだ。茜の体が飛び上がる。

「ッおお、おおおおっ♡♡♡」

「はあ……茜さん、最高だ……♡ あんまりかわいい顔しないで……」

「お、っお、おッ♡♡ 待っ、う、うううう～ッ♡♡♡ うあっ♡♡ うあ、うああっ♡♡」

「逃げないで。もっと虐めさせて。ああ……
茜さんの内蔵全部に触りたい……♡」

そう言って中の親指が前立腺を擦り上げる。
もしかしたら彼の指には、尿道側からそこを
押しつぶすブジーも感じ取れているかもしれ
ない。

茜は腰を突き上げるようにして喚いた。

「うあ、いく、待て、いくっ♡♡ っもら、
漏らす、漏らすっ♡♡」

「何を？ 茜さん」

「せっ、精液、っ漏らす、射精しないで漏ら
す……ッ♡♡」

中から前立腺を責められるせいなのか、そ
れとも尿道を広げられたことに原因があるの
か、茜は最近、これまでのように精液を飛ば
すことができなくなっていた。

どろどろとあふれるような、粘度の高い排

泄のような射精なのだ。もちろん快感はあるけれど、茜にとっては異常な、ありえないことだ。どうしてもそれを射精と呼べない。

その無駄な羞恥心を指摘しないのは、温情なのか、それとも違うものなのか。

涼真は何も言わずに背中を丸めた。ブジーが刺さったままの龟头を、側面からしゃぶるように舌を這わせたのだ。茜の裸の足が涼真の座る椅子を搔きむしる。

「っお、お♡♡ いくっ、漏らすっ、漏らすっ♡♡ っはな、離して、くれ、頼むっおお♡♡ おうう、うううう～っ♡♡ 漏らす、漏らすう♡♡」

前から後ろから前立腺を刺激されるたび、テーブル上の腰が跳ねた。

茜は散々泣いて騒いで懇願して、支えきれずテーブルの上に倒れ込んで、声がかすれて

聞き苦しくなったところでようやく尿道ブ
ジーの頭を取られた。境目をほじるように舌
に舐め取られながら、ステンレスがじわじわ
と抜かれていく。

「お、お♡♡♡」

つるんと丸い先端が無くなって、一瞬後。
唾えるものを失い惨めに開きっぱなしに
なった尿道口に、ぷくっと白いものが浮かび
上がった。ほとんど固形になった精液だ。涼
真はその先端に口付けると、まるでストロー
でも唾えたように吸い始める。

どろどろと濃い液体が体の準備も待たず吸
引される感触。茜は地団駄を踏むように膝を
上下させて悶えた。

「あううう♡♡♡ うううっ♡♡♡ っく
そ、くそ、お、お♡♡♡ すっ、吸う、すう、
な、あ♡♡♡ あっ、あう、うう～っ♡♡

♡」

「……っあー……美味しい……♡ 舌で擦るともっと出てくる……♡」

「っお、おっ♡♡ おおおっ♡♡♡ っもうない、もうないっ♡♡♡ っも、もう、ないって、え♡♡♡」

ステンレスに擦り上げられ敏感になった内部を舌先で探られ、茜は子供のように泣きじゃくった。

もう出ないことは察したのだろう。それでも萎えていくものを名残惜しげに啄まれる。その唇が与えてくる快感はおっとりと穏やかで、茜は眠りのようにすうっと気が遠くなるのを感じた。

何十畳もあるようなダイニングとはいえ大きな声を出した。何をしているか、誤解する余地のない激しい声だっただろう。

けれど大丈夫だ。この何部屋あるか数える気にもならない屋敷には、目の前の子供しか

住んでいない。

【茜と目玉焼きの朝】

昨夜は布団に運び込まれたらしい。気付けば客間のダブルベッドで雀の声を聞いていた茜は、だるい体を押してキッチンへと向かっていた。

まだ七時前だ。早すぎるし、もちろん、あんなことをされる環境で空腹を感じるわけがない。

朝食の準備をするのは他でもない義務感だ。茜は、一応は、使用人という名目でここにいる。最低限目玉焼きのひとつでも並べなければ自分自身を騙せない。自分すら信じていない肩書きだとしても。

「……広い屋敷だ」

五十人分の靴を出したってまだ余りそうな土間。一人くらいなら暮らせそうな玄関ホー

ル。都内の一等地とは思えない贅沢な間取りを通り抜けながら、茜は無感情に呟いた。

広い屋敷。高校生がひとりで暮らす、寒々しい屋敷。

茜が来るまで通いの家政婦が使っていたというキッチンもまた冷たい。業務用を思わせる銀色のキッチンカウンターのせいか、それとも、茜が朝に火を使う以外利用されないからか。

寒いキッチンダイニングで茜は機械的に料理を始めた。卵を取り出す。有名ブランドのフライパンを取り出す。油を引いて、目玉焼きを焼く。

「……おはよう、茜さん」

対面キッチンだ。それに、学生の彼はいつもこの時間に降りてくる。

灰ブレザーの涼真が現れたのには気づいていたが、茜は意図して無視していた。もちろ

ん相手からの挨拶を待っていたわけじゃない。
茜は無言で調理を進める。

あからさまな無視は毎日のことだ。それでも傷つかないはずなのに、見かけによらず強心臓の涼真は、カウンター越しに茜を覗き込んでくる。

「体、つらいでしょう。いつも言ってるのに。ご飯なんていいよ」

「……俺は使用人として雇われてる」

「そんなこと」

「そういう契約を結んだだろうが。バカみたいな量の書類にサインさせて。違うとは言わせないぞ」

「……確かに名目上はそうだよ。子供の俺が茜さんをここに留めようと思ったらそういう肩書きにするしかなかった。けど俺は茜さんを使用人だなんて思ってない。家族みたいに感じてるし、そうなりたい」

「……やめろよ、それ」

「家族って？ でも本心だよ」

気持ち悪い。

もうパンを焼いてやる気は失せていた。茜は菜箸をシンクに投げつけたが、涼真は気にした様子なく続ける。

「俺は茜さんの家族になりたい。もし今すでに家族がいるなら俺だって遠慮するよ。仲間に入れてくれなんて言わない。けど……茜さんはもともと家族がいないだろう？」

「……………」

そうだ。

茜は孤児だった。家族の顔も知らない。覚えていないのではない。生まれたての猿のような、目も働いていない月齢で捨てられたのだ。だから、確かに、家族になるというならそれは新規の関係だ。誰かとの間柄に割り込んでくる形にはならない。

だが、あんな行為をされながら家族家族と言われるなんて怖気が立つ。そうじゃなくてもその話題は好きじゃなかった。

「……バカにしてるのか」

「してない。本気だよ。俺は茜さんの家族になりたい」

「キモイこと言うんじゃないねえ！ 強姦魔が！」

茜はらしくなく怒鳴り声を上げた。

「家族家族って、馬鹿にしてるのか！ 人の足元見てだまし討ちで呼びつけて、強姦して、それで家族!? 寝言にしたってもっとマシなことを言え！」

「……………」

「善人面してんじゃないねえよ！ 結局は性欲処理が目的だろうが！」

「茜さん」

「なんでっ、なんで俺がこんなことに…
…っ」

確かに、と思う。確かに、多少の危険は覚悟した。

家族がないせいだろうか、それともそもそもその性根だろうか。茜は昔から人付き合いが下手で、施設の中でも外でも友人らしい友人を作れなかった。独立してからだってそう。根暗で無口。どこでもそう思われたし、実際そうだった。

だから職場が倒産したとき、困っているんだ、と愚痴る相手はいなかった。再就職が決まらず貯金が底をついたときアドバイスをくれる相手はいなかった。ついに住処を失った茜に見知らぬ男が使用人の職を紹介してきたとき、奇妙だ、危ない、と引き止めてくれる人はいなかった。

茜にだって危機感はある。あやしいとは感

じたし、住み込みと聞いてレイプの可能性を考えなかったわけじゃない。けれど彼は貞節よりもっとひどいものまで奪った。

「こせ、っ戸籍まで……！」

最初の夜を過ごし、泥のように眠って起きた次の日の昼。

茜に差し出されたのは茜と見知らぬ夫婦が養子縁組をしたという用紙だった。涼真の知人、茜のように金でつながった知人夫婦だという。

まっさらな戸籍をさみしく思っても、他人で埋めようなんて考えたことはない。ましてや無許可でそんなことをされるなんて想像もしていなかった。

涼真は遠慮がちに茜の背に触れる。それが彼だと思うと怖気が立つのに、熱心に上下する手は温かい。

「……それは、ごめんね。茜さんを失いたくなかったんだ。逃げられるかもしれないって考えると気が狂いそうで、どうしても、追いかける手段を持っておきたかった」

「……………」

「……せめて……、せめてわかってほしいのは、俺がこんな非常識なことをしたのは茜さんだからってことだ。誰でも良かったわけじゃない。性処理なんて思ってない。ずっと前から、コンビニで働いてた茜さんを見たときからずっと好きで、ずっと茜さんが欲しかった。ずっと俺のそばにいてほしかった。そのために、今の俺にできる唯一の手段がこれだったんだ」

「……俺が悪いって言うのか？ 客のお前を、誘惑するような、変な顔をしていたって…」

「違うよ！ ただ一目惚れして、それで…」

「一目惚れされたら強姦されて、戸籍までお

かしくされるのか!？」

「そうじゃなくて……！ ……どうしてだろう。ただ大好きで、こんなに大事なのに、茜さんといつも上手く話せない」

その顔が本当に苦しげだから、茜は彼を憎みきれない。恐ろしい。どうかしている。そう感じて最後の最後、彼には彼なりの、茜に理解できないだけで何かしらの情があるのだと考えて、異常だと切って捨てられない。

「……………」

「朝ごはん、ありがとう。いただきます」

それでも彼は恐ろしい。茜は伸ばされた涼真の手にびくりと体を引いてしまった。

背後のオープン棚に背をぶつけた茜にやはり悲しげな瞳を見せつつ、涼真は料理とも言えない料理を取るとひとりでダイニングテーブルにつく。

六人掛けの、それでも十分すぎるほど広いテーブルだ。涼真は年齢相応の体格なのにぼつんと孤独に寂しく見える。幽体離脱して自分を見たらきっと同じ背中なのだろう。だから茜は彼を否定しきれない。

たった一枚の目玉焼きを食べながら、涼真は何かを悔いる声で言う。

「今日は送迎はいらないよ。電車で行く。それで、少し色々、反省する。俺の伝え方の何が悪いのか。俺が茜さんを好きだって、どうやったら茜さんに伝わるのか」

「……ゆ、誘拐されて、帰ってくるな」

「残念。父さんに身代金の請求が来るから、消えてそのままってことにはならないよ」

突き放すつもりの返答なのに、涼真はただ穏やかに笑った。

「政治家の子供だからね。色々周りがるさ

くなると思う。俺が帰ってきたほうが茜さんのためだよ」

「……………」

「ご馳走様。お皿、よろしくお願いします。それじゃあ行ってくるね」

味付けもなしに焼いただけの目玉焼きを食べ終わると、涼真はそれをカウンターへ戻し、足元から鞆を取り上げてそう言った。数秒、茜の言葉を待っている雰囲気でも黙ったが、無言に苦笑いを浮かべてダイニングを出ていく。

「……………」

豪華な屋敷だ。扉を閉められると外の様子は何もわからない。けれど誰の見送りも、誰の声もないことを、茜はもう承知している。

茜には家族がいない。けれど生活に家族がいないという意味なら涼真も同じだ。誰も暮らしていない屋敷。挨拶をする相手のいない

家。

日常化した孤独。それによって価値観が偏り、理解者を得られず、それによってさらに孤独が深まる負のループ。

茜は途端静まり返った屋敷の中で、誰にと
も知れず悪態をついた。

「……ちくしょう」

【宅配ボックスの荷物】

「……ただいま」

リビングにその声が聞こえたとき、茜は革張りのソファへハンドクリーナーをかけているところだった。

送らなくていいとは聞いたが、迎えもいないとは聞いていない。けれど茜はわざと下校の送迎にいかなかった。

登下校時間は送迎の車がずらりと並ぶ金持ち用の私立校だ。涼真は茜が迎えにきた車を探して、学校の前や駐車場をうろついたのかもしれない。おろおろと自分を探しているだろうか。

そう想像すると一矢報いたように愉快になって、だからわざわざリビングで男の帰りを待っていた。涼真の、あてが外れた顔を見てやろうと。

そして実際、涼真はあてが外れた顔をして
いた。

帰宅の声は拗ねていた。どんなことをして
も所詮は子供だ。茜はそう愉快になっていた
から、その言葉をほとんど意識しないまま落
としていた。

「おかえり」

弁解するなら体に染み付いていたのだ。大
規模なシェアハウスに近い養護施設では挨拶
は絶対の掟だった。朝はおはよう。夜はおや
すみ。そして帰宅時にはおかえり。店員が
来客の気配に反射的に口を開くように、茜は
ほとんど機械的に言う。言う。

無感情な、学校で義務的に聞くそれより
もっと温かみのない声だったろう。なのに涼
真はぱっと顔を輝かせて、そのたった一言で
不満すべてを忘れたように喜ぶ。

「茜さん！　もしかして今日わざと迎えに来なかった？　さみしかったよ。ずっとあなたのことを探してたのに」

「……おい、掃除してるの、見てわかるだろ」

「茜さんのことを探してあちこち歩いたんだよ。うちの車に慣れてないから混んでる方には来れないのかなって、駐車場まで覗いて」

「じゃれつくなくて」

茜はいつも黒い服を着ている。だから目立たないが、こんな状況に陥るほど困窮しているのだ、服は相応に汚れていた。

止めたというのに背後から抱きついてきた涼真は茜の上半身を撫で回すのをやめず、それどころかその手触りで気づいたというように視線を落とした。

「そういえば茜さん、いつも持ってきた服を

着てるよね。客間に着替えを用意してるのに。気に入らない？」

「借りる義理がないだろう」

「じゃあ……制服だって考えてよ。使用人なんでしょう？ その制服だ。それなら着てくれる？」

「く、……黒くないと落ち着かないんだよ。客間のは、色がたくさんある……」

「黒？」

「施設ではそういう服ばかりだったんだ。だから他の色だと目立ってる気がして……」

子供はすぐに汚すという合理的な理由なのだろう。施設で配布される服はほとんどが黒色だった。たまに寄付の服が並べられたが、ここぞとばかりに明るい服を奪い合う争いに茜は参加できなかった。

気付けば今ではカラフルなものはもちろん、白やグレーでも落ち着かない。自分が発光しているように感じるのだ。

注文をつけるような物言いだったのに、涼真は屈託なく了解する。

「そうなんだ。茜さんの好き嫌いが知れて嬉しいな。じゃあ、今度は黒い服を揃えるね」
「ちょ、っと……」

言いながら親しげに撫で下ろした手。

古びて生地が薄くなったニットだ。肩口から胸元へ下りた手がその突起に気づいた、と、もちろん茜自身も気づいた。

「っ、う」

びくりと肩が跳ねた拍子にハンドクリーナーがソファへ落ちる。茜は羞恥心を誤魔化すために間髪入れず怒鳴りつけた。

「っやめろ！」

「驚かせてごめん。でも……俺がそういう体

にしたんだよ。恥ずかしくないし、茜さんは悪くない」

「や、や……っ、やめ、ろ、って……え……♡」

「大好きだよ、大丈夫。俺が悪いから」

悲しいことに茜は涼真のタイミングで行為が始まることに慣れていて、だからいまさら制止が届かないことを気にしたりはしない。服の上からまだ小さいものを捏ね回されて、屈辱感は覚えても苛立ったりはしない。

けれどさすがに、この瞬間にその単語を聞き流せない。

「茜さんと家族になりたいんだ」

「ッやめろ！」

「う、わ！」

「家族家族って……お前にまともな家族像がないのはわかってるよ！　こんな環境じゃまともな精神にならない。家族観がおかしく

なって当然だし……っお、お前がおかしいのはお前のせいじゃない。っ、け、けど、こんなことしながら家族って……！」

きっとその嫌悪感は、本当の身内がいる人間とは少し形が違うだろう。茜が思い浮かべる家族像はフィクションのものだ。

それでも違和感は大きい。

茜に突き飛ばされた格好の涼真は、懲りずにすぐに茜の腰を抱いた。嫌がって身をよじる茜の肩に顎を乗せて囁く。

「違うよ茜さん。茜さんが思ってることは全然違う。俺の言う家族って、親族とか兄弟とかそういうことじゃない。茜さんとは違うことを思って使ってる言葉だ」

「違うって……」

「俺はその人のもので、その人は俺のもの。それで、その関係は絶対に失われないんだ」

「……………」

「甘えるんじゃない。戸籍とか血縁にあぐら
をかくんじゃないんだ。ただお互いに、この
関係はずっとあるって信じられる関係。相手
を思って、大事にして、その気持ちを伝え続
けて、それで絶対に離れない関係。夫婦には
離婚って選択があるだろう？ けど違う。離
れるなんて選択肢はないし、そうしたいとも
思わない。相手が自分を愛してるって疑うこ
ともない」

「……そんなの」

「俺はそれを、家族って呼んでる。あなたと
そういう関係になりたいって思ってる」

「そんなの……」

子供らしい、夢のような話だ。おとぎ話の
ように綺麗で都合がいい。あるならそれ以上
の話はないが、存在しないものだ。

空想だ。架空の話だ。それでもまるで夢み
たいに美しい。すぐには夢見心地から戻って
これなくて、茜の反論は力なく響いた。

「……っ、ご、強姦、だろ、やってるのは。
どういうつもりだって……」

「……そうかもしれない。俺の気持ちを上手く伝えられてないから、あなたにとってはそうでも仕方ない」

「……………」

「だから頑張らせて。あなたを愛してるって茜さんに感じてもらいたい」

そう言って涼真は不意に離れた。急ぎ足の背中が廊下へと消えるが、すぐに両手大の箱を持って戻ってくる。

茜は思わず眉根を寄せた。茜という住み込みの使用人がいるので、荷物類は基本自分が預かる。けれど一応、玄関先には宅配ボックスがあって、その鍵は涼真だけが持っていた。

つまりそちらに届いた荷物というのは、茜には持たせられないと彼が判断した荷物なのだ。良いものとは思えない。

涼真はサイドテーブルに置いたそれを開封し始める。妙な形に繋がった黒革。グローブのような手のひら大の革袋。その他意味のわからないものばかりだったが、最後、透明な袋に包まれたそれだけは理解できた。

「おい……まさか、嘘だろ」

「ん？」

「その歳でそんなもの、趣味が……」

それがそうなら、先に取り出されたふわふわとした長いものは。ベルトを小型にしたようなあれは。紐状のあれは。

思わず腰が引ける茜に、涼真は開封したそれを差し出してくる。渡すためではない。茜の真っ黒な髪と同じ、真っ黒な耳をその頭につけるために。

「茜さんは大事な家族だ」

確かに今どきはペットも家族だ。けれど自分がそう扱われて愕然としないわけがない。

「……………」

茜は頭に黒い犬耳カチューシャを付けたまま、呆然と目の前の男を見ていた。

【最初はご主人さま、次に犬】

最初に襲われたとき、茜は抵抗した。可能性は頭にあったとはいえ覚悟していたわけじゃないし、ましてや相手が学校に通っている年齢では、いざというときこちらが加害者だと言われてしまう。

けれどその反抗に対する罰は酷い責め苦で、茜は最後には自らセックスをねだっていた。痛みはない、けれどそっちのほうがマシと感じる加虐だったのだ。

もちろん、すべて涼真の作戦だろう。そう考えるように茜の頭は操られた。

わかっているが、今でもあのときのことを思うと彼に抵抗しきれない。

「……………」

茜は何度も何度も執拗にシャツの袖を引っ

張った。落ち着かなくて、そうしなければ立ってられないのだ。

二十も後半に差し掛かった男の犬耳。それだけだって冗談にならないのに、その上茜は革の首輪もつけている。太く編まれた赤いリードが垂れ下がっていることすら恥ずかしい。

「ああ、すごくかわいい！」

涼真だけが満足気だ。

「か、家族って、お前……これは、これは……」

「人それぞれだけど、血縁に向ける気持ちより、ペットを思う気持ちのほうが純粋なことってあるだろう？ それにペットだって家族だ」

「でも、お前……」

「本当にかわいい。ああ、かわいいなあ…

…」

涼真は反論が耳に入らないほど浮足立った様子で繰り返す。

ひとしきり茜の有様を眺めた彼は、さて、
と言うように箱に残ったふたつを取った。

「じゃあ全部脱いでくれる？」

「……っ、ここ、は、いやだ……」

場所は相変わらずリビングだ。ソファにローテーブル、茜の体より大きいテレビ。ふたりきりの家とはいえ唯々諾々と脱げる場ではないし、そもそも希望を言わせてもらうとどこでだって脱ぎたくない。

涼真は少し考える素振りを見せたあと、納得したように頷いた。

「そうだね。犬は自分で服を脱げない」

「っおい！」

「大丈夫。痛くしないから」

そんなの当たり前だ。脱ぐだけだ。

反論しようと開いた口は布に塞がれ閉じる
ことになった。めくりあげられたシャツの裾
だ。反射的に目を閉じれば、リードと首輪に
引っかかりつつも上着がいつも簡単に脱がさ
れる。

「ジーンズも」

「ぬっ、脱げる！　自分で脱げる！」

こんなの本当にペットか、もしくは幼児の
ようだ。

慌てる茜に涼真は物分りよく頷いて、頭の
犬耳を整えてから手を引いた。おそらくシャ
ツを抜くときに手にしたのだろう、赤いリー
ドを握ったまま茜が脱ぐのを待っている。

「……ひ、紐、おろせよ……」

「なぜ？」

「だって、その……首輪につながってる」

「うん。だから持ってるんだけど」

「……………」

気にする自分がおかしいのだろうか。

何にせよ彼が茜の願いを聞いてくれることはない。茜はただ気にしないよう己に言い聞かせるしかなかった。

その手から視線を逸らすようにしてジーンズの前を緩め、足元へ落とす。彼が微動だにせずさらに待つから、茜は最後の一枚である下着もおずおずと下ろした。

「よし」

ペットを褒めるような明るい声に言いたいことはあったが、全裸の今は口を開くのすら恥ずかしい。茜はできるだけさり気なく股間を隠しながら身を縮める。

「じゃあ次はこれだ」

「……な、何、それ……」

「ハーネスだよ。本当の犬なら首輪とハーネスどちらかだけでいいんだけど、茜さんに似合うと思って。ここの輪にそれぞれ腕を通して」

「……………」

「うん、ありがとう。苦しかったら調節するから言ってね。……はい、留めた」

背中に回った涼真がカチンと何かを留めた瞬間、猫背を直すような、両肩を引っ張るような力を感じた。

茜はおずおずとその革紐を探る。ところどころに鋏のついた、いかにもSMといった黒革だ。それが両肩から脇まで通っていて、左右の肩紐をつなぐように太いベルトが鎖骨下を横切っている。リュックの肩紐とチェストベルトだけ切り取った形、と言うべきか。

確かにハーネスだ、と茜は思った。前足を通した胴輪で散歩する犬をたまに見かける。茜が身につけているのは、いくらか装飾的ではあるが、まさしく犬のそれと同じだった。

「お、お前……、お……覚えてろよ……」

「忘れないよ。茜さんのこんなにかわいい姿」

涼真は背後から手を回し、ハーネスをたどるように茜の胸元をうっとりとした。

本当はきっと、もっと発達した胸筋を飾るためにあるのだろう。茜の貧相な胸では革ベルトが余り、隙間に指を入れられるほどスカスカだ。

身につけるほうが恥ずかしい衣装なんて初めてだ。けれど涼真は耳許で甘く囁いてくる。

「すごく似合ってる。かわいい。……黒にしてよかった。偶然だけど、茜さんは黒が好

きだもんね？」

「っ、黒って、服の、話で……」

「これも服だよ。ペットの服。……少し引っ張るよ。苦しくない？」

「……っ別、に、へい、っうう♡」

おそらく背中側も前と同じH型になっているのだろう。背後のベルトを引っ張られ茜は胸を張るような姿勢になった。その瞬間に乳首をつねられ、油断していた分大きな声を出してしまう。

「っは、は……っ♡」

「あとでこのベルト、穴ひとつ分短くしようか。茜さんは姿勢が悪いから少し引っ張るくらいがいいし、……それにそうしたら乳首が触ってほしそうになる」

「なってな、っ、な、あ、あ……っ♡♡」

すっかり弱点になってしまった乳首を捏ね

られるだけで反論が言葉にならなくなる。茜はソファの背に手を付こうとしたが、肩を引くようなハーネスのせいで不器用にもがくしか出来なかった。

涼真はしばらくの間そこだけをいじり回していたが、ふと、もう一方の手が裸の腰から下腹を撫でる。

「っりよ、う……っ♡♡」

茜は取り出される箱の中身を一通り見ていた。それが何なのか理解しないままではあるが、一応すべて見ていたのだ。だから、他に残っているのがどういうもので、その手がどこに向かうのかハッキリわかる。

「っ、う、あ……っ♡♡」

唾液だろう。ローションとは違うもので濡れた指が奥に触れる。

その場所を使われるのは悲しいことに慣れて
ていた。昨日は挿入されなかったが受け入れ
慣れた場所なのだ。本来なら不十分だろう唾
液だけでも指を飲み込んでしまうし、中指で
前立腺を捏ねられるだけで勃起し、そのうち
に先走りを垂らしてしまう。

肩口からその様子を覗いているのだろう。
涼真が耳に口付けながら言う。

「……かわいいね。気持ちいい？」

「うう、う……っ♡ っは、あ……あ……っ
♡ 気持ち、っよく、ない……っ♡」

「じゃあもっと気持ちよくしないと。ロー
ションがないから、先走りたくさん使わない
と茜さんが痛い」

「う、あ……っ♡♡ 何、っわ、わ……！
っひ、ひざ、持つな、待……っ♡」

涼真は背後から茜の腰を抱くようにして奥
を探っていたが、動きにくかったのか、ある

いは茜を辱めたくなくなったのか、不意に乳首を責める手を降ろした。なんだ、と思う間もなく膝裏を取られる。

膝を腕に引っ掛けられて、無理矢理に片足立ちさせられた。バランスを崩しつい背後の涼真に体重を預けてしまう。栄養状態の違いだろうか。身長差だってあるのに、涼真はびくともせず寄り掛かる茜を受け止めた。

足を開かせて触りやすくなったし、一旦手を抜いて前を扱けば先走りでわずかに濡れる。また中に戻ってきた涼真の指は、先程より遠慮なく動き始めた。

「ううう、うあ、あっ♡♡ りょう、っ、りょう、まっ♡♡ う、うう、っん♡♡ んんん、んん……っ♡♡」

「口を閉じたら駄目だよ。我慢しないで。声を聞かせてほしい」

「馬鹿なこと、お、おっ♡♡ っ、う、ん、んん……ッ♡♡」

「……一緒に口輪も買ったら良かったかな。
ぎゅって口を閉じて頑張ってる、かわいそう
だ。好きなだけ鳴いていいのに」

鳴くだなんて、ずいぶん動物のように言っ
てくれる。

そう思ってから茜は自分の有様を思い出し
た。首輪やハーネス、その上頭に耳をつけて
いる。こんな格好で人間だなんて思い上がり
もいいところだ。

大人の、肉のない骨ばった男の、一体何に
欲情するのか。尻に当たるストラックスの中の
ものは張り詰めている。

「っうう、んっ、んっ♡♡ りよ、う、ま…
…っ♡ っも、もう、っっこめ、る……っ♡
♡」

「できるときじゃなくて、茜さんがしてほしい
ときに入りたいな。ねえ、それより……今日
はもう十分出したよね、ここ」

そう撫で示されたのは陰茎だった。輪郭をたどるように登った指が、先走りを垂らす先端を意味深に擦る。

十分に出した。ならば。その先は明らかすぎるほど明らかで、茜は必死に首を振った。

「っい、いい！ 今日はいい！ あれは、っ、あ、あれ、は……っ、う、うっ♡」

「俺、茜さんのこの中に触るの大好きなんだ。……どうしてだかわかる？」

「わからないっ！ しなっいっ！ やめろ！」

「茜さんは犯されるのだって覚悟してきたけど、……この中、尿道に触られるなんて想像もしてなかった。茜さんが差し出す気でいた以外の、求められるとも思ってなかったところ。そこをいじめると、俺、茜さんを手に入れた気がして幸せになるんだ」

「っや、やだ、あ、あ……っ♡」

いじられ慣れた先端に指の腹が押し付けられるだけで、そこがひらいてしまったように感じる。普通の、当たり前の、未経験の穴。それとは比べ物にならないほどに広がって、本当は届かない粘膜に触れられている気がして怖くなる。

涼真はそんな恐怖を煽るように笑み混じりに囁いた。

「ほら、拡張しすぎてちょっと緩くなってきてるよ。栓をしないと漏らしちゃう」

「ゆる……っ、うう、う♡♡」

家中に忍ばせているのか、それとも新しいものを箱の中に隠していたのか。涼真は見せつけるように茜の目の前でいつもより短いブジーを揺らした。

これ見よがしに塗りつけられる殺菌ジェルに、茜は自分のものが先走りを垂らしたのを自覚する。いやだ、と思っているのは事実な

のに、そこをいじられる快感を思い出してしまった。

涼真は茜の勃起を支え持つと、つるんと細長い先端で尿道口をぐるりと撫でた。刺激と期待に茜のものがかすかに跳ねる。

「っりよ、ま、待っ……♡♡」

恥ずかしい。信じられない。怖い。

茜の制止に構わず、先端がゆっくりと尿道口の中へ侵入した。

「う、嘘、まで、うそ……っおお、おっ♡♡
やだっ、や、あ、あ♡♡」

「あ、いきなりガチガチになった。茜さん、もう中いじめられるの大好きになったみたいだね。ほら。擦られるの好き？ 前立腺に届いてなくても気持ちよくなっちゃった？」

「お、お、っううう……っ♡♡ ごし、っ
ごし、するな、あ……っ♡♡」

「ゆっくりゆっくり入れようね。ちゃんと入りすぎないようにしてるから大丈夫。……ほら、もうちょっと。もう少し」

「おおお、お、お……っ♡♡ や、ああ、はいっ、入る、う……っ♡♡ ……おおお、お……っ、お……っ♡♡」

「はい、今日のはここまでだよ」

「っひ……♡♡ うあ、あっ♡♡ お、お……っ♡♡」

ブジーの頭は亀頭に沿うような曲線になっていた。けれど尿道を犯されているときに「入りすぎないか」なんて悠長な心配はしてられない。

茜はのけぞるように涼真へ体重を預けたまま、中を犯す硬い感触に耐えていた。

裸だ。緊張は見てわかるだろうに、涼真は抱えていた茜の膝を手放すとゆっくり地面へ戻そうとする。僅かな身じろぎだけで棒が動き、滑らかな先端が勃起の中をかき回した。

「まっ、待って、え、え、えッ♡♡ おお、
お、うううっ♡♡ 待って、ま、あ、なか、
なかっ♡♡ 中、が、あ……っ♡♡」

「でもこっちもさみしそうだから」

「う、う、う……っ♡♡ こんなっ、こんな、
ところっ♡♡ へんたい、へんたい……っ♡
♡」

「落ち着いてきたかな？ ……肌が冷えてる。
大丈夫、ゆっくりするからね」

「なに、な、……っう、うっ♡♡」

ぐ、と奥に触れたのは柔らかいシリコン
だった。

指でかき回され緩んだそこにゆっくりと何
かが埋まっていく。バイブだろうか。小さめ
だし、尿道を塞がれながら中を犯されること
は常だったが、それでも平然としていられな
い。

茜の体は爪先立ちになり、腰を前に突き出

すようにして必死に逃げようとするが、背後から肩を抱えられた体勢ではそれ以上の抵抗は出来なかった。一番大きな部分まで啜えると収縮に合わせて残りも飲み込んでしまう。

「うああ、あ、あああッ♡♡♡」

びくびくと大げさなくらい陰茎が跳ね、絶頂したことをバカ正直に背後の相手へ知らせてしまう。涼真は嬉しげに笑いながら射精できないそれを丁寧に扱いた。

「犬のしっぽ付けられても漏らさなかったね。えらいえらい」

「あああッ♡♡ あッ♡♡♡ やめっ、おお、お、おっ♡♡ やめろっ♡♡ やめ、お、おおお……っ♡♡♡ イグ、イグ……っ♡♡♡」

「はは。手の中で跳ね回ってる。気持ちいいね。尿道塞がれながら扱かれるの好き？」

「っやだああ♡♡♡ ううう、ああっ、
あーっ、あーっ♡♡♡ おおおお……っ♡♡
♡ やだ、やだああ♡♡♡」

亀頭を揉まれながらブジーを抜き差しされ、
茜は恥も外聞もなく泣き喚いた。尿道だけでも死にそうなほど気持ちいいのに、中を責められるたび緊張した体がアナルバイブを食い締め前立腺を押し込んでしまうのだ。

このままだと絶頂感のループに入ってしまう。恐怖する裸の腹を、優しい、先走りであつたり濡れた手がさすった。

「よしよし。大丈夫大丈夫。ほら、戻っておいで。大きく息をして。ゆっくり。大丈夫だからね」

「お、お……っ♡♡ い、イ、イギ、たく、
ないい……っ♡♡」

「うん。リラックスしたら大丈夫。いじめてごめんね。口を開けて息して。大好きだ、茜

さん」

茜の汗で濡れた髪の中に顔を埋めるようにして、涼真が柔らかく囁いてくる。茜は朦朧としたまま小さく何度も頷いた。

「も、っもう、いい、もう……っう、う♡
もう、おわり、終わり……っ♡♡」

「昨日も茜さんだけだったでしょ？ 今日
俺も気持ちよくさせて。ほら、イッたりしな
いくらいにいじめるから」

「っふ、ふ、……っうううう……っ♡ うあ
♡ うあっ♡♡ っな、撫でたら、駄目だ…
…っ♡♡ ……ッ、あ、何……っ♡」

ばさ、と膝裏に何かが触れて茜はびくりと
肩を揺らす。

涼真の服かと思ったが、彼は制服だ、こん
な安い刷毛のような、ごわついた毛のあるも
のは着ていない。

茜は手探りしながら振り返る。己の手が捕まえているのは、ふさふさとした黒い尾だった。アナルバイブの装飾だろう。

それで頭が我に返る。体のすべてが気持ち良いまま、茜の理性がそんな自分を自覚したのだ。

「……っ、う、ううう……っ！ っな、なんでこんな、っ」

「茜さん？」

「いっ、い、犬みたいなの、こんな……っこんな！ う、ううっ♡♡」

「ああ！ 泣かないで。茜さんごめんね。泣かないで。こうしたら茜さんに俺の気持ちが伝わるかなって思ったんだ。大好きで、絶対に手放さない、一生の関係になりたいって伝えたくて、精一杯考えたんだ。少しだけ付き合っただけ。ほら。気持ちよくなるようによしよしするから」

「っやだあ♡♡ やめっ、やめろ、あ、あ♡」

♡ っあ、あ♡♡」

湾曲したステンレスの頭を弾かれるたび、尿道の内側が刺激される。出し入れされる快感とは違うが鋭く走る違和感が気持ちいい。体が緊張するせいだろう、尾がバサバサと本物の犬のように揺れた。

「う、ううう～……ッ♡♡」

「よしよし。尻尾振るの上手だね、えらいね。茜さんが嬉しそうで俺も嬉しい」

「ちが、っちが、うう♡♡ んっ♡♡ うあ、ああっ♡♡ 涼真、りょうまっ♡♡」

意図しているわけじゃない。けれど茜はいつの間にか否定を忘れ、ブジーの先端を掻く愛撫にまるでねだるように名を呼んでいた。

栓の隙間から漏れた先走りで、涼真の指先が何度か先端を掴み損ねる。茜は気付けば腰を突き出していた。差し出すようなブジーの

頭をようやくと指が捕まえると、それだけの振動で仰け反ってしまう。

「あうううっ♡♡ ……っあ♡ あっ♡♡
ごしごし、され、イグ、イグっ♡♡」

「これじゃあ前立腺に届かないのに、尿道いじめられるだけでイッちゃうんだ？ 茜さん、ここ気持ちいい？ イキそう？」

「うああ、うああ♡♡ イク、イクっ♡♡
もうイクっ♡♡ 抜いて、っ抜いてくれ♡♡
しっぽが、尻尾イク、い……っ♡♡ あ、あ、
抜ける、抜け、っう、あ、あ……っ♡♡
りよ、りょうまっ♡♡ その、っまま、っ抜
い、あ、あ……イ、い……っ♡♡」

「よしよし。もうちょっと我慢しようね」

「っおおおお♡♡♡ お、お、おおっ♡
♡」

先走りのまわり付いたブジーが前後しながらゆっくり登っていく。

抜ける、出せるという予感だけで脳がしびれそうになっていたから、込み上がっていた精子を押し戻すように挿入される苦しさすら刺激だった。茜は仰け反って絶頂した。

埋め直したそれで根本を混ぜながら涼真が覗いてくる。

「あれ？ イっちゃった？」

「……っひ、うあ、あああ……っ♡♡

い、っだ、あ♡♡」

「そうなんだ。茜さんの尿道、敏感になっちゃったね」

「ふあああ♡♡ イっだ♡♡ イっだってえ♡♡ もうやだあッ♡♡♡」

「射精してないもん、まだまだ気持ちよくなるでしょ？」

確かに勃起したままだし、射精を済ませていないせいか、尿道内を責められるだけですぐに快感を覚えてしまう。

茜は気付けば背後の涼真に体重のほとんどを預けていた。わずかに自分のほうが大きい。声の位置でそれがわかるのに、自分のすべてを手中に収めている涼真へ、甘える気持ちが抑えられない。

「もう、もうやだ、りょうま、りょう、う、う～……っ♡♡ おれの、っ俺の、ちんぽ、馬鹿になるっ♡♡ りょうまあ♡♡」

「大丈夫。ちゃんと躡けてあげるから。ほら茜さん。わんって言って」

「っば、ばか、馬鹿かっ♡♡ いわ、言わない、犬じゃないっ♡♡ っちがう、違う…っ♡♡」

「こんなに尻尾振って喜んでるのに？」

「ちがう、うう～っ♡♡」

「んん……そうか。まだ違うか」

まだ何も、過去も未来も人間だ。そう言いたいけれど尿道を責められると言葉が浮か

ばない。

涼真はしばらく思案顔で茜を弄り回していたが、そのうちにふと、優しい声で囁いた。

「おすわり」

「ん、ん……っ？」

突然の、唐突な命令だった。頭が付いていない。

ぼうっとする茜を肩口から覗き込むように涼真が目線を合わせてくる。キスできるほど近い距離で見つめられながら、もう一度、涼真に命じられた。

「おすわり、だよ。正座して。犬みたいに手を付けて」

「……そん、な」

「ん？」

「だって、だって、う、後ろは、うしろ…
…っ♡」

涼真が入れた。わかっているはずだ。そこにはアナルバイブが入っているし、飛び出した尾が邪魔で正座なんてできるはずがない。

涼真は背後にいる。その手元は見えないのだ。だから不意に乱暴にアナルバイブを出し入れされて、茜は焼死体のように身を丸めた。

「っ、あ、あう、ううう～っ♡♡」

「ほら。出来ない？ 茜さん。おすわりすら出来ないの？」

「よご、っよごす、うあ♡♡ 汚すから、あ、あ♡♡」

「ラグのこと？ そんなのいいよ。茜さんは俺の願いを聞いてくれないのかって質問してるの。座るだけだよ？ 難しい？」

「ま、って、待って♡♡ うっ、うううっ♡♡
♡ する、っ、する、っか、らあ……っ♡♡
♡」

強い口調と同じ乱暴な手付きの前では拒絶を貫けない。

茜の屈服を待っていたように涼真はすぐに手を止めた。けれど尾を抜いてはくれないまま、温かい体が茜の正面に移動する。

「う、う……♡」

「もう少しこっち。そう。……そこに座って」

手を引いてくれたけれどその体温はすぐに去ってしまった。茜はリビングの真ん中、膝が伸ばせるよう設計されたシェーズロングソファの側面へ向かう位置に立ち尽くした。

涼真が見ている。促す視線の圧に負け、茜はおずおずと膝と手を付きしゃがみこんだ。そのままゆっくり腰を下ろしていこうとは思うが、尾の先端が床に届いた気配で体が止まってしまう。

「頑張って、茜さん」

「ほ、……本当に……」

「大丈夫。見てるから」

見られている。だからこそ嫌なのに、彼がいるからこんな状況になっているのに、まるで安心材料のように囁かれると混乱した頭ではそんな気がしてしまう。

涼真が見ている。だから大丈夫だ。茜はわけがわからないまま内心でそれを繰り返し、それからゆっくり尻を下げていった。

ふさふさと毛の長い尾だが、中には一本芯のようなものが通っている。最初のうちは良かったが、中腰ほどまで腰を下ろすとその芯が邪魔するようになった。バイブに近いほど硬いのだろう。そのうちに芯がしなくなっていて、床に押された刺激がそのまま腹の中へ届くようになる。

茜は涙目で涼真を見上げて首を振る。

「っ、こ、これ、いじょう、むりだ……っ♡
♡」

「本当？ あと少しだけだよ」

「ほん、っほんとう♡♡ むり、むり……っ
♡」

「んー……じゃあ、角度を変えてみたら？
そうしたら座れるようになるかもよ」

仕組み的にそうは思えない。けれど試さずに断ることは難しかった。脅されているだとか戸籍を握られているという不安じゃない。ただ純粹に抗えない。

茜は涼真を見上げたままおずおずと腰を回した。だが、芯を含む尾は外に飛び出しているのだ。どの角度にしたって腹の奥に響く。

涼真は楽しそうに笑った。命令とは裏腹に無邪気な笑みだ。

「はは。お尻回して。茜さん尻尾でオナニーしてるみたい」

「っちが、うう♡♡ りょう、りよ……っう、
あ、あああッ♡♡♡ うあ、うあっ♡♡ な
にっ、わ、何、動、うう、うううッ♡♡♡」
「あ、スイッチ入っちゃった」

腹の中のバイブが急に中をかき回す。尻尾の芯が床に引っかかっている分、動きすべてが体内に響いた。茜は慌てて腰を上げるが、動いているからすぐには抜けない。

「おおお、おおお♡♡♡ りょうっ、りょう
ま、りょうまあ♡♡ なにっ、なに、っうう
う、ううう～っ♡♡ たすっ、たすけて、
りょう、う、う♡♡」

「尻尾の付け根に操作スイッチがあったんだ。突起みたいな形だったからしっぽを無理に曲げたら電源オンになるなあって思ってたんだけど……本当にそうだったね」

「なん、っ、わざ、わざと、あ、ああ、あ♡
♡ とめっ、止めて、止めてっ♡♡」

「埋まったスイッチは指じゃないとオフにできないのに、お尻回してかわいいなあ。ほら、耳がズレてるよ」

涼真は茜の無駄な努力を甘く笑うと、カチューシャを直し、それからゆっくりと己のスラックスを緩めた。勃起したものを露出させてから、茜の目の前、ソファの足を伸ばす部分に腰を下ろす。

「嬉しいことは順番だ。ペットの舐ってそうなんだよね？　まずはご主人さま、それから犬」

「しつ、うう、うう♡♡　しつけ、何、っ
な、あ、ああ♡♡　っりようま、とめ……っ♡♡」

「茜さんが上手にできたらね」

リードをぐっと引き寄せられて、茜は涼真の股間に顔を埋めた。もちろん、そんなこと

をされなくても何を要求されているのかはわかる。

「う、う……っ♡♡」

その行為を求められたのは初めてだ。もちろん抵抗感がないわけではない。

けれど寸止めされて中をかき回されて、この状況で拒絶しきれぬ人間などいない。

「っ……す、する、から、ちゃんとできたら……っあ、ううう♡♡」

「うん。気持ちよくする。約束するよ」

止めてくれと言いたかったのに、そう囁かれると耐えきれないほど誘惑された。

茜は口内にこみあがってきた唾液を誤魔化すようにその先端に口付ける。妙な味はしない。茜は喘ぎ声を飲み込みながらおずおずと舐める。

「ん……う、う、……っん♡ んん……っ♡
っは……♡♡」

それで精一杯だと思ったのに、茜の口は段々と積極的になっていった。

何しろ涼真が反応するのだ。口の中のものが大きくなるのはもちろん、時々膝が小さく跳ねる。舌をまとわり付かせると、バイブの音に紛れるような小声とはいえ、ふ、ふ、と息遣いが漏れるのだ。

涼真が感じている。茜の行いで快感を得ている。

奉仕精神とは思いたくない。手応えとでも言うべきだろうか。自分にも何かが出来て、誰かにポジティブな感覚を与えることができる、自分の行為で喜んでいる、という実感。そう思うと、快感の声を飲み込まされ苦しくてぼうっとした頭のどこかが幸福感を覚えるのだ。

「……なーに見てるの」

「っ、うう♡♡ ううう♡」

涼真は茜の視線に照れたように笑って、黒いボサボサの髪をなでつけた。指先が犬耳を引っ張って遊ぶ。

声は甘い。今までだって茜を呼ぶ声は蕩けるようだったが、いつも以上に甘かった。うっとりとして快感を味わっている声音になぜか茜は腹の奥がむず痒くなる。

「ああ……茜さんのフェラ、すごく気持ちいいよ。舌がおずおずしてて、あー茜さんだなあって感じる……。だんだん一生懸命になっていくのがすごくかわいい。へたくそだけど、かわいくて気持ちいい……♡」

「……っ、う、ん……っ♡」

「……急に吸い付いて。嬉しくなった？」

「う、う、う♡♡ っんん、んん、ん……っ

♡」

「違うって言ってるの？　ちゅうちゅう吸われて気持ちいいだけなのに。あー……っ♡
茜さんがしてくれるなんて最高だ……♡　…
…ねえ、ごっくんって、喉奥に届いたとき飲もうとして。大丈夫。茜さんならできるよ。
大丈夫」

甘やかされると不思議な気持ちになる。

飲み込むなんて変なことだ。とんでもないことを求められている。けれど酸欠で朦朧とした頭の中が、応援されている、という奇妙な幸福感に包まれるのだ。

できると信じられている。できると応援されている。幸せで、その気持ちのまま従ってしまう。

奥歯が当たらないように大きく口を開いて、茜は恐る恐ると顔を埋めていった。喉奥だろうか。嘔吐反射が出るほど唾えこんでから涼真を見上げるが、視線がその先を促している。

嫌がってもいい。拒絶したって、きっと叱責されたりしない。

けれど茜は意を決して、顔を埋めると同時にごくんと飲み込もうとした。

もちろん嚥下して終わりではない。締まろうとした喉輪は太い亀頭で閉じられず、想像以上の苦しさに茜はソファに爪を立てる。

「おごっ、ごっ、ご♡♡」

「っ……ひどい音だ……っ♡ 俺のちんぽのせいで苦しいね、ごめんね、茜さん、ああ、かわいい……♡」

「っぐ、お、お、おっ♡♡ おーお、おお、っう、うう♡♡」

無理だ、やめてくれ、と見上げて訴えるのに、涼真はあろうことか茜の後ろ頭に手を回した。ぐっと引き寄せられると喉輪が彼のものを扱いてしまう。息苦しさで違和感で涙があふれ、顔中が様々な体液でべっとり濡れた。

そんな姿に涼真のものはさらに力を持つ。

「ぐちゃぐちゃになって……鼻水と涙まみれだ、ああ、かわいい……♡ もっと恥ずかしい顔にさせたいよ。乳首ももっと大きくして、ちんぽはその童貞のピンク色のままにしておこうね。そのためにはもっとアナルで感じさせないと……」

「ッオ、お、おおおおっ♡♡♡」

啜えこんだまま両肩を上から強く押され、茜は背筋をピンと伸ばした。吐き出すように涼真のものを出してしまったが、嘔まないようにするのが精一杯だった。なにしろアナルバイブが本体部分以上に入り込んだのだ。

「っあううう！ っりょうまあ、りょうまあ♡♡♡ あっ、あっあううう♡♡♡ っげ、っんん、げほ、っ、お、おお♡♡ じ、っ、しっぽ、お、おお♡♡ はい、っう

ううう♡♡ っげほ、っん、んっお、うあ
あっ♡♡ っえ、あああっ♡♡♡ あうう
うっ♡♡♡」

急な酸素に咳き込みながらも中をかき回され、えづいているような喚いているような、みっともない声を上げてしまう。

茜は必死に首を振った。自分の妙に粘ついた唾液にまみれた、涼真の勃起を顔で擦る形になったがそんなことを気にしてられない。

「もおいしい♡♡ いいっ、いいッ♡♡♡
っやめる、もうやめ、うああ、あああ♡
♡」

「良くないよ。もっともっと気持ちよくなれる体にしよう」

「やだっ、もういやだっ♡♡ あ、あうう
う、うああ、ああっ♡♡♡」

逃げようとする顔を股間へ押さえつけられ

ていたから、その刺激は唐突だった。

スリッパを脱いだのだらう。靴下の柔らかい、けれど足裏という屈辱的な部位が茜の裸の股間を踏む。痛みはもちろん、埋まったままのブジーが中でごろごろ動く感触に悲鳴があふれた。

「あーっ♡♡ あううう、あうううっ♡♡

っふむ、ふむな、あ、あああっ♡♡ 俺のちんぽ、踏まれて、い、っいく、踏まれて、うそ、うああ、ああっ♡♡」

「どろっどろの顔、最高……っ♡ ああ、エロいよ茜さん、すごくエロい、なんでこんな……っ♡ ッ茜さん、マーキングさせて。そのべちょべちょの顔にかけたい……っ♡ ほら、もっとみっともない顔になって、ほらっ！」

「おおおっ♡♡♡ おおっ♡♡♡ ふまれ、っ、ふまれて、イグ、イグイグイグっ♡♡♡ イギたいっ、イギたいっ♡♡♡

りょう、いく、いかせてっ♡♡♡ あ、あっ♡♡ ちんぽいく、あ、あ、いきたい、いきたいっ♡♡」

「ご主人さまの次だよ、犬は全部ご主人さまの次……っ。ほら、俺のこともっと気持ちよくして。わんって鳴いて！」

「わ、っわ、わん、わんっ♡♡♡ りょうま、い、いって、はやく、う、ううう～っ♡♡♡ ちんぽ、いかせ、っい、う、うう♡♡♡ りょうまあ♡♡♡ わんっ♡♡ わんっ♡♡♡ かけて、っかけ、かけてっ♡♡♡」

「あ、あ……っ、クロ……っ♡」

ぶわ、と頬のそれが膨らんだと思った瞬間、額に何か降り掛かった。前髪から目尻まで飛び散ったものを塗り広げるように顔を動かされる。

けれど屈辱なんて感じなかった。次だ、としか考えられない。涼真がイッた。次は犬だ。イかせてもらえる。

次は自分だ。やっとイケる。茜は踏みつけてくる足と床に腰を振って擦り付けながら必死に懇願した。

「イキたいっ♡♡ イクっ♡♡ イクッ♡♡
あうう、ううっ♡♡ りょうま、りょうまあ
♡♡♡ いが、っいがせて、イグ、イグっ♡
♡」

「クロ」

「あ、あ、あっ♡♡ なに、な、あ、あうう
うっ♡♡♡」

「クロ。俺を見て」

それは何だ。不意に頭に疑問が浮かぶ。まるで呼ぶようなその単語は何だ。

名前。

呼ばれている、と脳の一パーセントで理解する。クロ。新しい名前だ。名前？ 茜にはもう名前がある。涼真だってずっとそう呼んでいた。

唾液と鼻水と涙に白濁液が混じった顔にも、疑問が浮かんでいたのかもしれない。涼真は身をかがめ、茜の唇にキスしてからそのままの距離で囁いた。

「俺の大事な家族には名前が必要だ。そうだろう？ 他人が付けた名前じゃ駄目だ。それも、名簿から順番に選んだ名前なんて」

そうだ。孤児の一部、本当に親がわからない子供は名簿から順番に名付けられる。少なくとも茜の地域はそうだった。人名というだけで結局は番号をふるのと同じだ。茜の名前は姓も名も番号でしかない。

けれど強く踏みつけ直され、一瞬の思考はすぐに霧散する。

「めい、っおお♡♡ おおおおっ♡♡♡ い、い、っうう♡♡」

「クロ」

「りよ、うう、うう♡♡♡ ちんぽいく、ちんぽ、ふまっ、ふまれてっ♡♡♡ 踏まれて、もらす、もら……っ♡♡♡」

「クロ。今イカせてあげるからね」

「おれ、おれはっ、おれっ、ううう♡♡」

「クロ、だよ。クロ」

甘い声。これは自分だけと呼んでいる。

クロ。はじめての自分の名前だ。嬉しくなる。

どれだけ安易でも、自分を示す、自分を思って決められた名前だ。もしかして番号順に選ばれたものより自分を表しているんじゃないだろうか。

涼真はゆっくり手を伸ばすと同時に足をずらした。踏みつけた足から覗く先端、ブジーの頭を見せつけるようにつままれる。

至近距離の瞳が優しい。

「クロ、よし。イッていいよ」

その瞬間プラグを抜かれて茜は全身を縮めながら叫んだ。

「っ、あ、う、あうううううッ♡♡♡」

物理的な栓で塞がれていただけで、もう根本にはあふれるほどの精液が溜まっていた。プラグをずるずると抜かれてしまえば耐えられる理由もなく、どろどろと濃い液体をラグに漏らしてしまう。

「おおお♡♡♡ おっ、おお、おおお♡♡♡♡」

尿道はもうすっかりおかしくなって、まるで排泄のような吐精だった。射精のように断続的に出すことはできないのだ。だから本来は一瞬一瞬感じるだけの快感が、漏らしている間永遠に続く。

「ああああ……っ♡♡♡ あうう～……っ♡♡♡」

「クロ。いい子だね。クロ……」

茜はいつの間にか涼真の膝に頬を乗せ、スラックスに唾液を垂らしながらその快感を味わっていた。やさしい手が何度も頭を撫でてくれる。合間に首輪や耳をいじるから、その都度茜は自分が犬であることを思い出す。

クロ。ペットの名前だ。犬の名前。けれど名簿から順番に割り振られたものとは違う。自分を思って付けられた、自分の名前だ。

「りょう、りょうま、あ、あ……♡♡♡
あう、うう♡♡♡ っまだ、まだ気持ちいい、
まだ出る……っりょうまあ……♡♡♡」

「うん、いい子だね。もっと出して」

「ああ、ああああ……っ♡♡♡ きもちい、
きもちい……っ♡♡♡」

射精とは違う、漏らす感覚。とろとろあふれていく感覚。

だから茜は、アンモニアの匂いが立ちのぼるまで、自分が本当に漏らしているのだと気付けなかった。いつのまにか精液の代わりに尿が漏れていたけれど、快感には何の変化もなかったのだ。

我に返って慌てる頭を押さえつけ、涼真は熱心に、そして優しく茜の頭を撫で続ける。

「っりょ……♡♡」

「大丈夫。わかってるよ。でも気にしないで、クロ。そのまま全部出していい。気持ちいいでしょ？」

「っ、で、でも……う、うう♡♡」

「大丈夫。心配しないで。嬉しくて気持ちよくてわからなくなっちゃっただけだもんね。俺がそうしたんだから大丈夫。おもらし癖はゆっくり直していこうね」

そうだ、嬉しくて気持ちよくて、わからなかった。涼真に躡けられた通りになった。彼の言う通りだ。

茜の体からはじわじわ力が抜け、ラグを濡らしながら涼真の膝に甘えてしまう。

嬉しかった。名前も、そして許す言葉もだ。頭も体も何もかもが気持ちよかった。

【クロの朝】

なんて醜態を晒したんだ。

茜はその日、キッチンに出るのが十分ほど遅くなった。余韻が残るまま夜を過ごして眠りにつき、そして朝起きてやっと我に返ったのだ。

目の前で漏らした。もちろんそれは涼真が茜の体をおかしくしたせいだが、それでも漏らしたのは自分だ。犬の耳を付けて犬のしっぽを付けて、首輪を引かれて、漏らした。こんなの本当に犬ではないか。

「っううう……！」

忘れたくても体にはハーネスの痕が残っている。茜は慌てて服を身に着け痕跡を隠すけれど、自分の頭から事実を覆い隠すことは出来ないのだ。

クワの人生 サンプル版

2022年03月01日 発行

2023年02月01日 修正

発行者 へのまえ
表紙 ぬま蛙様

@NUMAsan_1206

発行者連絡先 ninomae335@gmail.com

Twitter @nino_mae_bl

無断転載・複製・複写を禁止いたします